

1965年から考える

— アメリカの人種，民族，エスニシティ —

杉山 恵子

はじめに

1965年はアメリカ史やアメリカの人種問題に関心のあるものにとっては転換期として常にふりかえるべき年と思われる。ひとつには公民権法が長年の闘いの末やっと勝ち取られ、投票権法が成立した年であったこと、そしてもうひとつはこの法の制定に比べて当時は影が薄かったもののアメリカの将来を考える上で大きな変化をもたらした移民法の改正がなされ、大幅な移民緩和へ向かった年であったからである。ケネディ元大統領の有名な就任演説を引用して、議会で新しい移民法を擁護したのは当時のジョンソン大統領であった。「(この移民法は)『あなたがこの国のために何ができるかを問う』ているのであって、決してどこの国で生まれたか、を問題にするのではない。^①」という発言はきわめて象徴的である。冷戦の激化を背景にアメリカの国家目標の確認を迫られたとき、表向きには人種や民族の多様性に寛容であることが民主主義国アメリカの理想の具現化に不可欠であることが宣言されたからである。

1965年の移民法は専門職を持つものを重視する移民法と解釈され、当時の深刻な医師や看護婦不足を補う目的が込められていた。しかし予想外の変化を生んだのは議会が永住権保持者の家族呼び寄せを優先する法として修正していった点にある。それは移民の血縁者の入国のみならず膨大な不法移民を呼び込む結果を生んだ。「アメリカの諸都市が移民であふれるようなことはない。この法案でわれわれの社会の民族地図はかわりはしない。^②」というロバート、

エドワード・ケネディ兄弟の予想に反してアメリカにとって19世紀末の移民に匹敵する移民の波が人口動態を大きく覆す流れとなったのだった。近年、歴史学、政治学、社会学、経済学など各界でアメリカの将来についての論争がくりひろげられてきた。アフターマティヴ・アクションやバイリンガル教育についての論争はもっともよく知られているところだろう。ここでは本来異なった領域で、また対象の広さ、深さにおいて差はあるが人種と移民に関わる代表的なものを取り上げて概観したいと思う。

1965年とはどのような年であったか

教育、雇用、住居などの差別を禁止した公民権法が1964年にジョンソン政権下で成立した。翌65年は投票権法の成立をみてアフリカ系アメリカ人（以下黒人という。）の参政権が保証された。ここに至る長く厳しい闘いについてはよく知られているところだが、奴隷制度というアメリカの歴史が抱える最大の汚点は、南北戦争という多大の犠牲を払っても解決するどころか形をかえて様々な差別法となり南部旧奴隷州に生き残った⁽³⁾。これを覆す闘いの最終段階を飾ったマーチン・ルーサー・キング牧師と南部キリスト教指導者協議会の役割、またそれを支援した北部リベラルとの共闘はアメリカの平等の理念の確認のみならず、政治的に現実のものとしていくための第一歩を開いたといえるだろう⁽⁴⁾。

ところが皮肉なことに制度上白人対黒人の解決をみたこの年はロサンゼルス、シカゴ、ニューヨークなどの北部諸都市で黒人暴動が多発した年としても記憶されなくてはならない。日常的に続いていた差別こそ北部黒人に絶望的な思いを抱かせていたのである。これは同時に北部黒人と南部黒人の違いを際立たせ、黒人問題の深さをアメリカ全土に印象付けることになった⁽⁵⁾。この時北部黒人の間にも1920年以降カリブ海諸島地方から移民してきた黒人と南部から移住して北部都市部に定着した黒人との間に亀裂が認められたのだが⁽⁶⁾、暴動の凄まじさと貧困の現実を前に十分な注意が払われたとは言えない。むしろ行き過ぎた公民権運動の結果と捉えられたのだった。この時の都市貧困黒人層への恐怖は病的イメージとして生き残り⁽⁷⁾、「アンダークラス」とい

うこれも定義のあいまいな呼び名で引き継がれ⁸⁾、「福祉依存者」としてレーガン政権がジョンソン政権時代の社会福祉政策をつぶすのに政治的に利用した。こうした北部都市黒人貧困層の状況を構造的に分析して説得力があったのはスタンレー・リーバーソンの研究だろう⁹⁾。

黒人がアメリカ南部から北部諸都市に製造業に雇用されて入り込む時期が遅く、東欧・南欧からの移民がすでに1920年代に非熟練の仕事の多くを確保してしまっていたとするものである。しかもその製造業が70年代から海外の低賃金地域に移ることから、ますます底辺層の黒人は職の無い状況に置かれたのであった。問題は景気を取り戻して広がるサービス業をだれが担うかであるが、ここであたらしくはいつてくる移民層が関係してくるのである。

1965年は移民法でも画期的な変化が起こった年だった。1924年以來の割り当て移民法が撤廃されたのである。排日移民法としても知られる1924年の移民法は19世紀末の第2次産業革命と呼ばれる工業発展を支えた移民の流れにとどめを刺したものだ。1890年から1924年までに西海岸に中国や日本から、東海岸にはロシア、イタリア、ギリシャなどの東欧・南欧から2千3百万におよぶ移民が到着した。ワスプと呼ばれる人々にとっては、宗教、習慣、言語の異なる人々はしだいに脅威と感じられるようになった。革新主義時代と呼ばれ連邦体制が強化されて行くこの時期の著作は移民がらみでも数え切れないほど多い¹⁰⁾。すでに1894年にヘンリー・キャボット・ロッジを中心にボストンには移民制限協会が発足していたが、1903年、1907年、1917年、1921年としだいに厳しくなっていた移民法の末、割り当てを算出する基準年を1890年にまで引き下げることによって（1921年の基準年は1910年）、新しく入ってきたアジア系や東欧・南欧系移民を排除することが完結した¹¹⁾。

この移民法を覆したのが1965年の移民法だった。ジョン・ハイナムによると1930年代からすでに全体主義を意識してそれに対抗するアメリカ像にそぐわないとされこの移民法を改正する動きがあったとされる¹²⁾のだが、戦後のアメリカの対外的な立場と前述の公民権運動の影響下で1924年の移民法は撤廃された。その後1965年からいくつかの修正を通して1996年に至るまで、さきにのべたように予想をはるかに上回る移民の到来を招いたのであった。

かねてよりアメリカ移民史は黒人奴隷と先住アメリカ人を除外してきた。なぜなら「移民」とは自らの意志で移り住んだことを前提としてきたからである。今日でもエリック・フォナー編著によるアメリカ史の動向解説書は「アフリカ系アメリカ人」と「エシニシティと移民」を別立てにしておなじ土俵での議論を難しくしていることにおどろかされるだろう⁽¹³⁾。1965年を振り返ることはまさにこのことを修正し、この年から同じ土俵で議論がなされるべきだと言う点の確認にほかならないのである。

20世紀後半のアメリカはどのような状況なのか。

まず人口動態を見ることが近年のアメリカの動揺を知る前提であろう。たとえば1950年に68%の移民の出身地がヨーロッパやカナダであったものが、1971年から1991年にはメキシコの23.7%を筆頭にヒスパニック系（スペイン語を母語とするセンサス上の区分）が47.9%、アジアからが35.2%となり、ヨーロッパ、カナダは13.8%に下がった。もちろんこれには不法移民（そのほとんどがメキシコからの移民）はふくまれていない。1980年半ばには、移民出身国としてのイギリスはメキシコ、フィリピン、韓国、キューバ、インド、中国、ドミニカ、ベトナム、ジャマイカ、ハイチ、イランについて12番目であった。1990年から2030年の間に黒人人口の伸びは68%、アジア系は79%、ヒスパニック系は187%と予想されており、比べて白人人口の伸びは25%と人口統計局は算出している。さらに2080年には合衆国の半数以上が非白人と予想されておりアジア系が12%、黒人が15%、そして24%がヒスパニック系とされてる⁽¹⁴⁾。人口動態の変化はそれ自体が問題なのではない。問題はそれぞれがどのように自らをアメリカ社会で位置づけ、政治的に、文化的に影響を及ぼすか。いままでの力のバランスを変えるのか、ハイアラーキーを崩すのかという点なのである。そして動揺の背景はそれぞれの移民集団が1965年以降政治的にも社会的にもそれまでのアメリカ社会を崩す力をつけているという事実なのである。

どのような議論が展開されているか。

新しい移民と黒人の動向をいち早く予想し、近年もっとも影響力があった著作はアーサー・シュレジンジャー・ジュニアの『分裂の時代——多元文化社会についての所見』（1991, 1998）だろう⁽¹⁵⁾。アメリカ国内のアフリカ中心主義に代表される民族主義の行き過ぎを警告し、ロサンゼルス暴動を予見したといわれたものである。黒人ロドニー・キングが白人警官から暴行をうけたことに端を発した1992年のロス暴動は1965年の黒人暴動とは根本的に異なった。それは黒人对白人の対立より黒人对韓国系アメリカ人の対立を表面化したことだった。急速に台頭してきた韓国系移民への反発が根底にあったとされるが、韓国系だけではない、暴動の対象は中国系、日系、ベトナム系移民にまで広がった。移民の流入は人種問題を悪化させ、ひいては「バルカン化」をまねくのではないかというもっともペシミスティックなアメリカの将来を描き出して人々の不安感を代弁したかたちになった。かつてケネディ大統領のブレインを勤めたシュレジンジャー・ジュニアの発言はその数年前に、大学における西洋古典の軽視とエスニック・スタディの行き過ぎを批判してベスト・セラーになった、アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』（1987）⁽¹⁶⁾よりはるかに説得力をもって分裂主義の危険を説き支持を得たのであった。一方ニューヨークに目を向けるとラティーノとよばれるラテンアメリカ、カリブ海からの移民の状況を調査したマイケル・ジョーンズ・コアの『二つの国の間⁽¹⁷⁾』は、「アメリカ化」は出来ないものと決め付けられたなかで宙ぶらりんになるカリブ移民が政治的にアメリカに入り込むことを拒絶するすがたを伝えている。黒人層や他の白人移民層との亀裂も深く、抗争も一触即発の状況である。ニューヨークでもロサンゼルスでも暴動がけっして繰り返されない保障はない。

一方これと対極にあるのがアメリカはおそかれはやかれ交じり合い人種の褐色化あるいはブラジル化が進むとする見方である。人種や民族の階層はなくなるとするもっとも楽観的なものだ。それを“トランス・アメリカン・メルティングポット”（1995）⁽¹⁸⁾と呼んだのは『ニューヨーカー』に寄稿するポ

ピュラーなコメンテーター、マイケル・リンドである。これはあきらかにランドルフ・S・ボーンを意識して使われた用語である。19世紀末の移民に排他主義的であった白人エリート層に痛烈な非難を浴びせたボーンが説いたのは白人の優越主義こそ変わらねばならず、出身国の文化を温存するかたちでアメリカ化をはかることにおいて先着ヨーロッパ人も後続の東欧・南欧ヨーロッパ人も同様であることであった⁽¹⁹⁾。リンドにとって、これではまだマイノリティ連合、あるいは移民連邦と呼ぶべきものであって充分ではない。かれの説くのはどのエスニック・グループも突出せず完全に文化的にも交じり合い、人種的にも交じり合う、レイシャル・メルティングポットなのである。しかしレイシャル・メルティング・ポットとよぶにはデータとなる人種をこえた結婚率の資料はあまりにも少ないだろう。もっとも、アメリカにとってはイブラエル・ザングウィル⁽²⁰⁾ 以来のパワフルなアメリカのイメージであることにはまちがいない。

これら両極端の間に位置するのが、「黒人阻害型」と「対白人型」とでも名づけられるものであろうか。これらを概観する前にまず新しい移民達にとって手本はあるのかという問いを發してみよう。彼らにとって参考になるのは19世紀末に移民した東欧・南欧からの移民であろう。「人種」の概念があいまいであったことはのちに議論するが、ユダヤ人種（ジューイッシュ・レイス）、イタリア人種（イタリアン・レイス）とよばれて人種化された19世紀の移民達は、人種化から抜け出すために、そして主流化するために行動様式、価値観を白人化した。この場合黒人は蚊帳の外におかれた。これを「黒人阻害型」とでもよぼう。ピーター・D・サリンズが『アメリカ式同化』（1997）⁽²¹⁾ のなかで今日の移民によびかけている方法はまさしくこれである。過去に有効だった「同化の魔法」が今も働いており、今まで通りのプロセスで良いとするのは寛大な移民政策の擁護であり、移民に不寛容になった時代に安心材料を提供しているといえよう。この著作のなかでは黒人もすでに独自の主流化のながれに乗っていると考えられており、新しい移民たちと関わることのない中で議論されている⁽²²⁾。サリンズが黒人を別立てで考えるのとは異なり、移民と黒人をおなじ土俵でとらえた研究がフィリップ・カジニッツの『カリブ移民

のニューヨーク：黒人移民と人種政治』(1992)⁽²³⁾である。これはカリブ海からの黒人移民がアメリカの厳しい人種差別をさけるために、カリブ地方のすぐれた民族的ルーツ、言葉、慣習を強調することによって人種による黒人同志の結びつきを退ける行動をとることを指摘してものだ。第二世代になるとこの傾向はさらに強くなるとメアリー・ウォーターズはいう。英語のなまりも消えアメリカ黒人とより間違われやすいからだ⁽²⁴⁾。希望的に語られる同化説やメルティング・ポット説へ厳しい研究結果をつきつけている。19世紀末の移民がけっして黒人の地位を押し上げなかったプロセスを繰り返すものだ。しかし「黒人阻害型」あるいは「民族性強調型」ともよべる傾向は今後の移民の行動を予測する上で欠かせないもののひとつといえるだろう。

1965年以降の黒人、移民を取り巻くもうひとつの流れが白人社会に対抗して黒人と移民が手を組むという構図である。「人種共闘・対白人型」とでもよぼう。これは市長選挙を巡って、もっとも具体的に各地であらわれたといえよう。たとえばニューヨークでは初の黒人市長デイビッド・ディンキンズはラティーノ票の三分の二を獲得して当選した⁽²⁵⁾。新しい移民の集中する都市部から変化が生まれる可能性を予側するものだ。もっとも一時的な選挙権の行使だけでは不十分とするみかたもあろう。なぜならこの連合も一期しか続かなかった。またラティーノと括られる中には、プエルトリコ、ドミニカ、キューバ、サンサルバドル、メキシコ、ニカラグア、パナマ、コロンビア、ベネズエラと多様な背景が存在し、黒人とプエルトリコ、ドミニカと黒人、ドミニカとプエルトリコなどさまざまな連帯の可能性があるのである。選挙戦の他にもニューヨーク市立大学におけるプエルトリコ系とアフリカ系の学生達によるカリキュラム改革などもワズプ中心のカリキュラムへの異議申し立てであったことも思い出すと今後もっとも身近なレベルでの様々な共闘が展開されて行くだらう。

以上「分裂・バルカン型」、「褐色・ブラジル型」、「民族強調・黒人阻害型」、「人種共闘・対白人型」と非常に単純化して1965年以降の黒人と移民を巡る発言と行動、予想されるパターンのいくつかを見てきた。結論が出せる段階ではないが、どれもが極端な形へとすすむ、民族ナショナリズムを牽制し、同

時に排他的な白人優越主義に警鐘を鳴らしているといえるだろう。また、「人種」、「民族」、「エスニシティ」が入り交じり境界が曖昧なことがわかるだろう。アメリカでいうエスニック集団とは民族的な自治権を求める民族集団とは異なり、同じ出身国からの移民を単位にするものが多くそれぞれの集団の境界が曖昧なのだ。

「人種」、「民族」、「エスニシティ」の曖昧さは何を意味するか

曖昧で流動的な人種、民族観を強調することで過激な民族ナショナリズムや排他的な白人優越主義を退けようとする意図は、「白さ」の程度をめぐる最近の研究にも見られるだろう。イアン・ハニー・ロペスの『法によって白人』（1996）はまさに市民権をめぐる「白人」を定義するのに紆余曲折をくりかえすアメリカの1878年から1944年に至る法廷が舞台である。そこではインド、シリア、中国からの移民を一時「白人」とみなして市民権を与えたがのちに剝奪するなど人種の曖昧さと混乱を物語っている⁽²⁶⁾。「白さ」の絶大な特権と「人種」が恣意的に作り出されてきたことをわれわれに見せてくれる。またウェーナー・ソラーズはまさにそのタイトル『エスニシティの誕生』（1989）⁽²⁷⁾の中でその概念が20世紀初頭に作られたこと、最初に辞書にその語が登場するのはなんと1940年になってからであるとしている。一方『白さの賃金』（1991）⁽²⁸⁾ではアイルランド人が「黒人」と見なされ差別されてきた歴史を、『白さの違い』（1998）⁽²⁹⁾では東欧・南欧移民、ことにユダヤ人が人種が異なるとして差別されてきた歴史をつまびらかにした。そこでは「人種」も「エスニシティ」も「性」に対する「ジェンダー」のように政治的、社会的、文化的に作られたものなのだ。しかし19世紀の移民達にとって、「エスニシティ」が生み出されたことで「白人」化が可能になったとするならば、けっして21世紀にむけて人種や移民問題を解決するにあたって望ましい見本にはならないだろう。境界の曖昧さはより建設的な方向で議論されなければならないだろう。

以上非常に単純化した形で振り返ってみたが結論から言えばあらゆる可能性、多様な発言が共存していることがアメリカらしさと言えるだろう。前述したソラーズは、『エスニシティの理論』を編集しその概念の曖昧さを過去の

社会学者の著作を溯って読み直すことを提案している⁽³⁰⁾。いたずらに「民族」や「エスニシティ」に振り回されないことを提言しているといえよう。「人種」か「エスニシティ」のどちらかなのではなく相互のダイナミズムとインターアクションを見て行くことこそ1965年の遺産であり、実験国家アメリカにふさわしいといえるだろう。

注

- (1) Michael Lind, *The Next American Nation: The New Nationalism & the Fourth American Revolution*. New York: Free Press, 1995, p. 132.
- (2) *Ibid.*
- (3) Leon Litwack. *Been in the Storm So Long: The Aftermath of Slavery*. New York: Knopf, 1979. C. Van Woodward. *The Strange Career of Jim Crow*. New York: Oxford University Press, 1974. などがあげられるだろう。
- (4) Alden D. Morris. *The Origins of the Civil Right Movement: Black Communities Organizing for Change*. New York: Free Press, 1985. Harvard Sitkoff, *The Struggle for Black Equality*. New York: Hill & Wang, 1981. David Garrow. *Bearing the Cross: Martin Luther King and the Southern Christian Leadership Conference, 1955- 1968*. New York: Morrow, 1986. などがあげられるだろう。
- (5) Joe R. Feagin and Harlan Hahn. *Ghetto Revolts: The Politics of Violence in American Cities*. New York: Macmillan, 1973.
- (6) Harold Cruse. *The Crisis of the Negro Intellectual: A Historical Analysis of the Failure of Black Leadership*. New York: Quill, 1984.
- (7) Kenneth B. Clark, *Dark Ghetto: Dilemma of Social Power*. New York: Harper & Row, 1965. 「病理」の側面が社会政策に影響したことへの言及は Daryl Michael Scott, “The Politics of Pathology” in Brian Balogh (ed). *Integrating the Sixties*. University Park: The Pennsylvania State University Press, 1996.

- (8) Michael Katz ed. *The “Underclass” Debate : Views from History*. Boston : Beacon Press, 1994.
- (9) Stanley Liberson. *A Piece of the Pie : Black and White Immigrants since 1880*. Berkley : University of California Press, 1980.
- (10) Moses Rischin. *The Promised City : New York’s Jews 1890– 1914*. Cambridge, Mass : Harvard University Press, 1962. John E. Bodnar. *The Transplanted : A History of Immigrants in Urban America*. Bloomington : University of Indiana Press, 1987. Herbert G. Gutman. *Work, Culture, and Society in Industrializing America : Essays in American Working-Class History*. New York : Vintage, 1977. などがあげられる。
- (11) John Higham. *Strangers in the Land : Patterns of Nativism , 1860– 1925*. New York : Atheneum Books, 1977. Barbara Miller Solomon. *Ancestors and Immigrants : A Changing New England Tradition*. Boston : North-eastern University Press, 1956.
- (12) John Higham. *Send These To Me : Jews and Other Immigrants in Urban America*. New York : Atheneum, 1975. 斎藤真, 阿部齊, 古矢旬訳, 『自由の女神のもとへ : 移民とエスニシティ』平凡社 1994。
- (13) Eric Foner ed. *The New American History* (Edited for the American Historical Association). Philadelphia : Temple University Press, 1997.
- (14) Lind. *The New American Nation*. p. 134.
- (15) Arthur M. Schlesinger, Jr. *The Disuniting of America : Reflections on a Multicultural Society (1991)*. New York : W. W. Norton & Company, 1998. 都留重人監訳 『アメリカの分裂—多元文化社会についての所見』岩波書店 1992。
- (16) Allan Bloom. *The Closing of the American Mind*. 1987. 菅野盾樹訳 『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房 1988。
- (17) Michael Jones-Correa. *Between Two Nations : The Political Predicament of Latinos in New York City*. Ithaca : Cornell University Press, 1998.
- (18) Lind. *The Next American Nation*.

- (19) Randolph S. Bourne. “Trans-National America (1916)”, in Werner Sollors ed. *Theories of Ethnicity: A Classical Reader*. New York: New York University Press, 1996, pp. 93-108
- (20) Zangwillは1909年にアメリカ社会を象徴する戯曲『メルティング・ポット』をニューヨークで上演した。
- (21) Peter D. Salins. *Assimilation American Style: An Impassioned Defense of Immigration and Assimilation as the Foundation of American Greatness and the American Dream*. New York: Basic Books, 1997.
- (22) *Ibid.* Chapter 9.
- (23) Philip Kasinitz, *Caribbean New York: Black Immigrants and the Politics of Race*. Ithaca: Cornell University Press, 1992.
- (24) Mary C. Waters. “Ethnic and Racial Identities of Second-Generation Black Immigrants in New York City.” in Alejandro Portes ed. *The New Second Generation*. New York: Russell Sage Foundation, 1996, pp. 171-196.
- (25) William W. Sales Jr. And Roderick Bush. “Black and Latino Coalitions: Prospects for New Social Movements in New York City” in James Jennings ed. *Race and Politics*. New York: Verso, 1997, pp. 135-148.
- (26) Ian F. Haney Lopez. *White By Law: The Legal Construction of Race*. New York: New York University Press, 1996.
- (27) Werner Sollors ed. *The Invention of Ethnicity*. New York: Oxford University Press. 1989, Introduction pp. ix-xx.
- (28) David R. Roediger. *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*. New York: Verso, 1991.
- (29) Matthew Frye Jacobson. *Whiteness of a Different Color: European Immigrants and the Alchemy of Race*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1998.
- (30) Sollors ed. *Theories of Ethnicity*. New York: New York University Press, 1996.